

国際化時代における宗教の機能

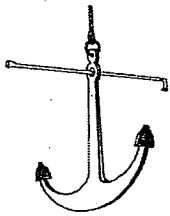
田丸徳善

I はじめに

近年しばしば「国際化」が語られるようになり、この表現が手ごろなキャッチ・フレーズとして、いたるところで用いられるようになっていく。新聞や雑誌などで、わが国の経済の国際化を指摘したり、あるいは教育制度の一層の国際化を要請するといった趣旨の記事は、殆ど枚挙に暇がないほど目につく。また最近、ある総合雑誌では、オリンピックを契機とした「韓国の国際化」についての特集をのせていた。これらの場合を考えると、

「国際化」とはある特定の国あるいは民族が、国際社会の正當な一員として認知されるとともに、その条件としてまたは結果として、なんらかの点で他国と共通の様式なり基準なりを採用するというほどの意味かと思われる。ただ、何れにしてもこの語は、ジャーナリズムが好む多くのキャッチ・フレーズの例にもれず、きわめて曖昧な内容のものであることは、おそらく否定しがたいであらう。

しかしこうした用語法は、ただ単にジャーナリズムの世界にとどまらず、今日ではアカデミックな研究の領域



にも、少しずつ浸透する兆しが見え始めている。例えば、かつては「外交史」と呼ばれていたような分野は、今日ではしばしば「国際政治(学)」と称せられるか、またはその一部とみなされるようになっていく。また、多分ここ数十年の急速な経済関係の拡大を反映してであろうが、「国際金融(論)」あるいはさらにひろく「国際経済(学)」というような新しいテーマが、比較的早くから確立していたとみられる。「国際法(学)」とならんで、市民権を獲得しつつある。それがかなり多くの大学のカリキュラムに取り入れられている現状は、その明白な証拠とみてもよいであろう。これらは時として、その上位概念としての「国際関係(論)」のうちに包括されることもあるが、さらに興味をひくのは、やはり最近、「国際文化(論)」などという、きわめて内容の捉えにくい呼称までが登場してきたことである。少し立ち入ってみると、それは従来の外国語ないし外国史などの研究を衣替えたものにすぎないことが多いが、それに取って「国際」という形容詞を付するところに、まさに現代の問題意識があらわれているといえなくはない。

これらは、たまたま目にとまったいくつかの兆候を取りあげてみたまでであるが、われわれはそこから、本稿の主題にとっての一つの示唆をひきだすことができるかと思われる。そもそも「国際化」が何を意味するかを知るためには、まずそれを表現する用語ないし概念を手がかりにするのが、最もてっとり早い方法だからである。この表現が正確にいつごろから用いられるようになったのかは、必ずしも明らかではないが、十九世紀半ば、最初の労働運動組織としてのいわゆる「第一インターナショナル」(一八六四―七四)の旗印に掲げられたのが、おそらく最も早い用例の一つであろう。しかし、それが普及するのは、ごく大まかにいって今世紀の初めごろから、そしてより決定的には第二次大戦の後からと推定して、ほぼ誤りないと思われる。

いうまでもなく、「国際的」というのは、英語その他における「international」の訳語として定着したものとみられる。かつてこれと類似の意味をもって使われたものには、「world」または「universal」の語があり、それらは大抵の場合、「万国」あるいは「世界」という形

に置き換えられていた。これらは完全に死語になったわけではなく、一部ではなお依然として通用しているが、次第に「国際的」と言い換えられているといえよう。そして、上記のように、この傾向はアカデミックな世界でも認められる。例えば、今世紀の前半までの社会科学の成果をあつめ、セリグマン(E. R. A. Seligman)によって編集された労作が *Encyclopedia of Social Sciences*, 15 vols. 1930―35 という標題をもっていたのに対し、現在それにかわる代表的な事典は *International Encyclopedia of the Social Sciences*, 17 vols. 1968 (ed. by Sills, Macmillan) と名づけられている。これはほんの限られた一つの例にすぎないとはいえ、よく全般的な動向を示すものといつてよい。

ごく一般的にいうならば、およそある事柄が意識され、さらには研究の対象とされるということは、すでにそれが現実に否定しがたいものとして存在することを前提とするものである。少なくともその発端にあつては、意識化とそれにもづく主題化とは、ある種の事実ないし現実の基盤があつて、はじめて成り立ちうるのである。当

然のことながら、この原則はまた、ここでのテーマである「国際化」ということについても当てはまる筈である。なんらかの形で国際化の現実が、それについての考察や分析を可能とし、また必要とするのである。それでは、その国際化とは一体いかなる事態をさすのであろうか。——ここでわれわれは、宗教の問題を考えるに先立って、まず意識と事実という両面をふくんだ国際化ということについて、しばらく検討してみることにしよう。

II 国際化の意味と特徴

「国際化」が international = inter nationes から由来するとすれば、それは基本的に「諸国民のあいだの」あるいは「諸国民の境界をこえる」というほどの意味だと考えられる。いうまでもなく、この「国民」(nation)の概念は、古代いらいのながい歴史をもっているが、それが今日ふつうに理解されるような形をとるにいたったのは、端的にいつて近代以後のこととみることができる。近代、すなわち大体十七世紀に入るところから、とくにヨーロッパにおいては、一方では地方的・封建的な統治組織

と、他方ではキリスト教にもとづく普遍的な統一文化とがしだいに崩壊して、それぞれに特色をもった国民国家(nation-state)が成立し、今日に及んでいるわけである。ここで注意すべきことは、かくして成立した「国民」が、実際には複雑な要因をふくんだ複合的なものだということである。それはある特定の地域に居住して生活を営み、共通の言語・習慣・宗教など、すなわちひろい意味での文化を共有するものではあるが、同時にまた一つの政治的な単位をもなし、他から区別されるのである。

これらの諸要因は、その適用される範囲にかんして、必ずしもつねにたがいに一致するとはかぎらない。それらは、現実にはいろいろな形で結びつきうるが、便宜上、仮に三つの範疇^{はんちゆう}にわけてみるのが可能ではないかと思われる。すなわち、有形・無形の財の獲得、産出ならびに交換という、生活の下部構造をなすものとしての経済的な要因、集団としての統制にかかわる政治の要因、そしてそれらに支えられつつ、しかもそれらに影響するところの文化的な要因とである。宗教も、差し当たっては、この第三の文化的な要因にかざしておくことにしよう。

象と解することができる。また、上述のように、これらの諸要因のカバーする範囲が決して同一でないことも、事態をさらに複雑にする一因といってよいであろう。例えば、およそ言語は文化の基盤ともいうべきものであり、民族を構成するに不可欠のものであるが、一つの国民国家が必ずしも単一の言語だけでなく、むしろ複数のそれを認めているケースはかなり多い。いわゆる多民族ないし多言語国家と呼ばれるものがそれに当たる。反対に、言語を共通する人びとの範囲、すなわち言語共同体は、しばしば国家の境界をこえてひろがっているのである。

これはどこにでも認められる、ごくありふれた事実にすぎないが、テーマである国際化の考察をすすめるに当たって、忘れてはならない重要な一つの視点をなすものである。というのは、このことは国民国家というものが、決して絶対的な準拠枠ではありえないことを意味するものにほかならないからである。今日の国民国家は、もはや単一ないし等質的なものではなく、それ自体としてかなり複合的な構造をもっているのがふつうである。それらは、いま述べた多民族あるいは多言語国家といった場

ところでこれらは、その作用という点からみて開放と閉鎖、凝集と拡散という、相反する二つの方向性をしめすと考えることができる。経済的な要因、とくにその一環としての交流活動は、概していえば開放あるいは拡散への可能性をもち、実際その方向に働くことが多い。古来、通商や交易がしばしば異なった地域、国々、民族のあいだを結びつけてきた事実をみても、このことは明らかであろう。これに対して政治的な要因は、何れかといえば、閉鎖性をつよめる傾向がよい。そして第三の文化的な要因は、状況に応じて閉鎖と開放とのどちらにも作用するものとみられる。

もちろん、これはごく一般的な傾向性を述べたものにとすぎず、実際の姿はこれよりはるかに錯綜している。例えば、経済は開放を促進する要因だといったが、それが場合によっては、一見逆の閉鎖的な方向をとることもありうることは、いわゆる保護主義をめぐっての最近の論議をみても明らかである。これは、本来はある意味での合理性に従って動く筈の経済活動が、もう一つの重要な要因である政治によって、異なった方向にむけられる現

合を別にしても、殆ど例外なしに、多くの下位集団を自らのなかに抱え込み、それらの微妙なバランスのうえに成り立っているとみられる。それは、主に経済的な地位の差にもとづく階層であることもあろうし、また政治的な路線の区別にもとづく政党といったものであることもあろう。さらには資質とか教育の程度とかによる、エリートと大衆との別も考えられる。何れにしてもそれは、内部にいろいろな要素をふくみながら、外部に向かっては「主権」という形である種の統一をしめすという、折衷的な性格をもつのである。

以上かんたんに指摘したことは、今日のいわゆる国際関係を考えるための、最初の手がかりを提供してくれる。この関係はいろいろの角度から、またいろいろなレベルにおいて分析してみなければならぬ。まず最も形式的には、それは国家と国家とのあいだの外交的な関係として成り立っており、時としては条約や協定といった形の表現をとることもある。これはいわば、国際関係の制度的かつ靜的な側面ということもできる。しかし、ただちに明らかなように、制度はその内容をなすところの動的

な相互作用をはなれてあるものではない。したがって、この制度面を捉えることは、それなりの意義をもつものであるとしても、より重要なのはこの動的な実態にせまることであると思われる。このようにみると、国民ないし国家相互の関係を論ずるに当たって、ただそれらを代表する機関（政府など）だけに焦点を絞ることでは不十分であり、むしろそれら機関の行動を規定している内部的な要因や状況を、ともに視野にいれておくことが必要になってくる。さきにも述べたように、「外交史」がしだいに「国際政治（学）」に展開し、例えば「世論外交」といったテーマが取り上げられるにいたったのは、そのためと考えられる。

現代が国際化の時代だといわれるとき、それはただ単に、ごく少数の人びとのみからなる公的な機関の結びつきだけをさすのではなく、それぞれの国民を構成するよりひろい階層相互の関係の展開、あるいは緊密化をいうものにほかならない。その実質的な内容をあらわす最もいちじるしい指標は、おそらく人的、物的ならびに文化的という諸側面をふくんだ、高度の流動性（mobility）の

うちに求めることができるであろう。ここで問題になるのは、社会内（国家内）の流動性もさることながら、とりわけ社会間（諸国家間）での流動性の増大である。例えば、国外旅行というような形で社会間の人的な流動は、もちろん従来も行われてきたことであって、必ずしも新しいものではない。しかし、今日の特徴は何といっても、それが僅かの人びとの特殊な体験にとどまらず、交通手段の発達によって、殆ど大衆的といつてよい程までに一般化したことである。たとえ一時的なものであるとはいえ、異なった社会の人びとおよびその文化に直接に接触する機会が与えられるということが精神生活におよぼす効果は、決して少ないものではない。

もつとも、一口に流動性といっても、それにはさまざまな形態ならびに程度が考えられる。いま一例としてあげた旅行は、概して短い期間のものが多いといえるが、時にはそれがかなり長期の滞在にわたることもないわけではない。そしてこのような社会間の人的な移動は、一定の条件のもとでは、ほぼ恒常的なものとなり、定着にいたることもありうる。いわゆる移民（移住）のケース

がそれであり、しかもそれは個人を単位とすることもあれば、なんらかの集団を単位とすることも多い。そのような場合には、その個人または集団が相手の社会にどこまで適応できるか、あるいは逆に相手からどのように受容されるかといった問題が生じることになる。この移民のような現象は、それ自体としてみれば流動性の終息にほかならないが、しかし、そもそもそれを可能にするのは、全般的な流動性なのであるから、やはり他のケースとともに合わせて考えるのが適当であろう。何れにしても、国際化ということの考察において最も重要なのは、この人的な流動性であると思われる。というのは、物資の流動とか文化（正確に言えば文化要素）の流動とかいった他の要因は、結局のところ、人びとの生活に関連するかぎりにおいて、意味をもつものにすぎないからである。

さきにわれわれは、「国際化」という事態の内容を考えるに際して、近代における国民国家の成立ということの一つの手がかりとした。国際化が「諸国民のあいだ」、「諸国民の境界をこえる」ことをさすすれば、それは国民ないし国家の存在を前提して、はじめて意味をなす

筈である。この点からすれば、国際化は近代あるいは現代に独特の現象であるということになる。しかし、検討の途中でわれわれはまた、この国民あるいはとくに政治的（行政的）な単位としての国家が、必ずしも絶対的な準拠枠ではありえないことをみた。そしてさらに、この場合に重要なのは、いろいろな意味での流動性であることが明らかになった。もしそうであるとすれば、国際化は必ずしも近代あるいは現代だけに限られない、ということにならないだろうか。

このような設問は、ことによるとはなはだ唐突な印象を与えるかもしれない。けれども、これまでの歴史を少しく顧みれば、それが決定的外れなものではないことが理解できると思われる。もちろん、「国際」とか「国際化」というような表現は用いられなかったにしても、それに類比されうるような事態、ならびにそれについての明確な意識といったものは、いろいろなところに見いだされるのである。ここではその一例として、古典古代末期のことにのみ言及しておくことにしたい。周知のごとく、アレクサンダー以後のいわゆるヘレニズム期にな

ると、西方世界においては、それまでの基本的な社会の単位をなしていた都市国家が没落して、より大きな体制のなかに組み込まれ、それとともに人びとの生活や文化のあり方も、きわめて流動的になっていった。これはいわば、その時点における国際化であったといってもよからう。そして他方で、当時の一部の人びとのなかには、それに対応する価値観が生まれるようになった。とくにストア学派が説いたコスモポリタニズム、すなわち「世界市民」の思想は、まさにそのような新しい世界観であり、道徳であったのである。そして、これに類するような事態は、歴史上なお多く見いだされる。

もしこのような見方ができるとすれば、国際化とは時と場所とを問わず、歴史のなかでつねに働いている一つの方向性にはかならない、ということになる。それはきわめて単純な、いわゆる未開社会においてさえ見いだすことができるものである。すでにデュルケムは、オーストラリアの未開部族を扱った古典『宗教生活の原初形態』(一九一三)の末尾において、かれらの宗教に「インターナショナル」な原理が内在していることを、鋭い洞

察をもって指摘した。もっとも、つねに潜在しているこの方向性が、およそ転換期とよばれるような状況において、とりわけ明確な形をとることもたしかである。そして、現代もまた、おそらくそのような時代の一つであるといえるであろう。その意味では、現代の国際化は過去の多くのケースと共通する点が少なくない筈である。ただ、違うところがあるとすれば、それはロバートソンも強調するように、現代においては、人類の生活圏が文字どおり地球の全体を蔽うにいたったということである。つまり、現代の国際化はまた「地球化」(globalization)なのであり、それぞれの国民もまた個人も、まさにグローバル(地球的)な規模でたがいに依存しあうにいたったのである。

Ⅲ 国際化と宗教の機能

これまでわれわれは、国際化と呼ばれている事態について多少の検討をくわえ、それが歴史のなかで働いている一つの基本的な方向性であることを確認した。それは、言葉を換えれば、個別から普遍へとむかう運動だとい

こともできる。それぞれに地域的で特殊な生活を営んでいた人びとは、たがいに接触し交流することで、しだいに共通の地盤を獲得し、よりひろい枠組のなかに位置づけられていくのである。そのような動きを推進する要因が、少なくとも一部、テクノロジーなど生活の下部構造のなかにあることは、おそらく否定できないであろう。現代における諸国民のグローバルな結びつきは、バーガーなどいうように、明らかに工業的な生産にもとづいた世界的な経済システムの形成がもたらした、一つの結果だといってよい。

しかし、このように言うことは、必ずしもその他の部分、とりわけ社会的な形態とか宗教をもふくんだひろい意味での文化とかが、全面的にそれによって規定されることまでも認めるものではない。歴史の最終的な動因が何であるにせよ、人間の社会生活や文化は相対的に独立したものとして、ある程度まで、それ自体の内的な法則にしたがって展開するのである。そこでつぎに、こうした国際化のプロセスのなかで、宗教がどのような機能を果たすのかという問題にむかうことにしよう。

まず注意しておくべきことは、「国際化時代における宗教の機能」ということのテーマが、二重の意味をもっているという点である。すなわち、それは一方で、この国際化とよばれる時代環境のなかで宗教、あるいはむしろ諸宗教がどのような役割をになっているのかという、事実にかんする問いをふくんでいる。しかしそれは、他方では、宗教はいかなる機能を果たすことが期待されるのかという、理想あるいは目標についての問いと解することもできる。いうまでもなく、これらの二つはまったく別種の問いであって、たがいに混同されてはならない。

第一の問いは、現実にもまれるさまざまな具体的な事例の分析を必要とし、その積み重ねによってのみ答えうるものである。これに対して第二の問いは、当事者の価値判断によって決着されるべきものであり、一義的な答えはありえない。以下では、ただちにこのどちらかの立場にたつのではなく、試みにいわば第三の道をとることにしたい。それは、考えられうるいくつかの典型的なケースを取りだすことによって、それぞれの場合に、宗教がどのような機能を果たすかをみるものである。それによ

って、一定の条件のもとで、個々の宗教がどのような形で作用するであろうかを推定することが可能となると思われる。

つぎに必要なのは、いままでただ慣用にしがたつて用いてきた「宗教」の内容を、いま少し詳しく規定することである。さきに宗教は、言語や習慣などとともに、下部構造としての経済あるいは集団の統制にかかわる政治から区別され、ひろい意味の文化にふくめて考えるべきだといわれた。しかし、厳密に考えると、この見方は多少の修正を要するといわなければならない。というのは、およそ文化が人間の生活様式ならびにその所産を意味するのであれば、それは担い手としての集団あるいは社会と切り離せないものだからである。宗教の教えや教義、あるいは価値観などはたしかに文化の領域に属する。だがこれらは、ただ観念的な形で存在するわけではなく、具体的にそれを信じ、また行じる人びとの集団という姿をとる。つまり、宗教はつねに思想としての面とともに、組織（教団）という面をもち、両者はたがいに独立しながらも関連しているのである。そして、さらにこの組織

じられないことも、また明らかであろう。これらは、国際化の最も主要な指標をなすと考えられる流動性の度合において、大きく異なるからである。身近な経験にたづねてみても、例えば都市的な環境の方がそれ以外のものに比してはるかに流動的であることは、殆ど疑いの余地がない。これは差し当たりは同一の社会内部での問題であるが、また社会相互の間についても、似たような差異が存することが認められる。

いま述べたのは、主として宗教のおかれていた環境的な条件の歴史的な差異にかかわる問題である。しかし、それとやらんで、むしろ宗教そのものの側の性格や内容の違いというもう一つの問題があり、これら二つは互いに関連しあっている。宗教自体の側での差異のなかでも最も重要なのは、民族的（エスニック）な宗教と超民族的なそれとの区別であろう。多くの——見方によっては大部分の宗教は、何れか特定の民族を基盤とし、また担い手として成り立っている。その宗教の組織も思想的な内容も、ともにこの民族集団と密接かつ不可分である。民間信仰あるいは土俗信仰の類いは明らかにここに属す

の面についてみれば、それが個々の信者から構成されていることはいうまでもない。ここからして、一口に宗教といっても、個人の信仰ないし宗教性をさす場合と、何らかの組織をさす場合とがあることになる。要するに、宗教の機能というテーマは、少なくとも宗教の思想、個人の宗教性ならびに教団という三つの焦点をふくんでおり、それらに即して多角的に取り扱わなければならない。

われわれが体験する実際の宗教は、いま述べたような複合的な構造を有しながら、しかもそれぞれに具体的な歴史的状况のなかで、それぞれに特殊な性格や内容をもっているものである。それらのあり方はまさに千差万別である。けれども、それらのあいだにいくつかの典型的なケースを区別することは、必ずしも不可能ではないと思われる。さきにわれわれは、デュルケムによりつつ、ひろい意味での国際化の傾向は、いわゆる未開民族のあいだにさえ認められることに注目した。しかし、そのような過去における国際化と現代のそれとが同じでないことは、改めていうまでもない。そして現代のなかでも、高度に工業化された地域とそうでない地域とが同日に論

る。これに対して、いわゆる普遍宗教と呼ばれるものは、民族・言語・文化などの障壁をこえてひろまる傾向を内在させており、したがってまた、地域的にもかなりひろく分布することが多い。ただ、ここで注意すべきことは、この区別が決して絶対的なものではないことである。すなわち、普遍宗教とみなされるものは、とくにその成立と伝播の局面ではたしかに民族などの壁をこえるにしても、定着の局面になると、それぞれの民族社会に同化し土着化するものがふつうである。そうでないならば、宗教としての役割を果たすことは、そもそも不可能であろう。他方、一定の条件のもとでは、もともと民族的な性格の宗教がその基盤をはなれて、異なつた民族の社会に伝えられ、そこで根をおろすことがありうる。それはまさに、国際化という時代環境のなかでしばしば生じる事態であって、現代にもいくつかな実例をみることができるのである。

さて、繰り返し強調してきたように、国際化ということとの最も主要な指標は、地球上の諸民族ないし諸社会間での高度の流動性に求められる。これは、宗教との関連

でみるならば、どういふことになるであろうか。差し当たって言えるのは、すでに示唆したところであるが、流動性と名づけたものについても、いくつかの型あるいは度合いがあるということである。つまり、宗教の部分的な要素の流動と、全体としての信者集団そのものの移動とは同じではないし、諸宗教のあいだの間接的な伝播と直接的な接触による相互作用とは、一応は区別してみなければならぬ。ごく卑近な例をとるならば、近年わが国では、クリスマス風習がかなりひろく浸透してきている。しかし、これをもって直ちにキリスト教が定着したと判断するならば、おそらく性急にすぎることになる。それはキリスト教の部分的な要素の一つにすぎないからである。けれども、それほど表面的であるにしても、それをまったく無視してしまうのも、また適切ではあるまい。現在のわが国に、それほど多くはないにせよキリスト教人口が存在することも、また否定できない事実なのである。

このことから分かるように、地球化の時代といわれる現代の一つの特徴は、これら宗教の部分的な要素の流

動と、人的・組織的な面をふくめた意味での流動とが、複雑にからみあいながら進行していることにあると思われる。

このように間接的および直接的な相互作用というプロセスのなかで、個々の宗教のおかれた位置は、もちろん一様ではない。ただ、かりにやや図式的な言い方をすれば、その相互作用には、どちらか一方が何らか（経済的、軍事的、政治的、文化的など）の意味で優位にあるようなケースと、両者が比較的に対等の位置にあるようなケースとがまず分けられるであろう。前者のケースでは、概して優位にあるものがそうでないものに影響し、場合によっては、それを全面的に排除することさえありうる。キリスト教による中・南米文化と宗教の *conquista* は、その一つの典型的な例であった。しかし、これはかなり極端な例であり、ふつうは影響は少しずつ、長い時間をかけて進むものと考えられる。かつてのわが国における仏教の受容は、そのような経過をたどって行われたのである。

これに対して、後者のように落差がそれほど顕著でな

いようなケースでは、相互作用ははるかに複雑な仕方で行われるのであって、そこにはつきりした型を見いだすことは難しいと考えられる。

国際化という状況が、諸社会の交流の機会をたかめることによって、また宗教（思想としてあるいは組織として）相互の接触をも緊密にすることは疑いないが、それは言い換えれば、基本的な選択が求められることにほかならない。受け取る側からするならば、自らを閉ざして異なったものを排除するか、あるいは開放によってそれを受容するかが、まず問われることになり、しかも後者の場合には、さらにその形式や程度が問題となる。しかし、国際化とはただ単に受け取ることだけではなく、また異なった地域・社会への進出を可能にするものでもある。

実際、ある種の宗教思想ないし実践・技法などがいわば輸出されたり、さらには伝道という形で移植が試みられることは、今日いろいろの実例が示しているとおりのある。そしてその際には、さきにもふれたように、相手の社会にいかにか接触していくか、つまり首尾よく適応できるか、または適応にいたらず摩擦をひきおこすかとい

う問題がまちかまえているのである。

以上、いくつかの視点からの考察が明らかにしたように、国際化という状況が宗教にとってもつ意味は、きわめて複雑である。ここで改めて問うならば、そのなかで宗教は一体どのような機能を果たすのであろうか。——たがたび述べたように、国際化とはそれぞれ特殊な背景をもった社会、民族、文化がたがいに接触し交流することとで、しだいに共通の地盤が形づくられていくことであり、一言でいえば、流動のプロセスにはかならない。それは、新しいものの創出の可能性をもちながら、他方、とくに既存の秩序の側からみるならば、不安定化を意味することかもしれない。

したがって宗教、とくに民族的な宗教など、伝統的な組織や価値と結びついたそれが、何れかといえば消極的・否定的な反応をみせることが多いのも、理解しえなくはない。いろいろな形の *fundamentalism*（根本主義、原理主義）をふくめて、およそ宗教的な保守主義はそのようなものであり、その例は過去も現在も数えきれない。それは、基本的には、それぞれの集団（または個人）の

アイデンティティをまもうという、いわば防衛的な方向にそったものである。

しかし、これは決して、国際化の状況のなかで宗教が果たしてきた唯一の機能ということはできない。さまざまな事例をみるならば、これとやらんで、少なくとももう一つの典型的な作用があることが明らかになるであろう。国際化ということがもたらす流動のプロセスは、その必然的な随伴現象として、しばしば伝統の基盤から切りはなされ、拠り所を失った個人や集団をうみだす。それは、もはやふるい形の組織や価値につなぎとめられることなく、しかも、ただ精神的な空白のままに生きることとできないような人びとである。これらの個人や集団にたいして、宗教は時として、新しいアイデンティティの形成のための結節点を提供するのである。

洋の東西を問わず、また各時代をつうじて、国際化にともなう社会的な変動の時期に、新しい宗教運動が発生し、展開することが多いのは、そうした理由によるものと考えられる。時に宗教の橋渡し機能 (bridging function) と呼ばれるのは、まさにそうしたものにほかならない。

それは、一見したところ、さきにあげた防衛的な作用とは逆のように思われるかも知れない。しかし、さらに掘りさげてみるならば、両者はともに生存に意味を与えるという、宗教の基本的な働きの一つの異なった表れともいえるのである。

(たまるのりよし・東京大学教授)